

インド佛教における沈黙の意味

紀野 一 義

—

インドの原始佛教・大乘佛教の持っていた深い宗教的世界を、現代人の感覚で掴み直して見たいというのがわたしの年来の願いであるが、ここ数年は、實存主義の哲學者たちの存在への接近の仕方に學んで、その宗教的世界を説明する努力をつづけている。

ここにとりあげようとする問題は、インド佛教における「呼び」と「語り」の問題であるが、その中でも特に「沈黙」の性格を掘り下げて考えて見たいのである。

この「呼び」と「語り」について明確な立場を打ち出したのはハイデッガーである。ハイデッガーは『存在と時間』の中で「現存在はマンの公衆性とその噂話の中に自分を喪失して、マン自己へと耳を傾けることによって、自分の自己を聞き逃している」が、「呼びは、現存在の自己を聞き逃しているマンへの聴入をうち切り」、本来的な自己存在へと呼びさ

ますのであると言っている。(p.271.)

また「語り」とは、何かについて何かを語る、即ち、語りかけられるもの *das Beredete* と、語られるもの *das Geredete* とを持つものであるが、良心の呼びにおいて、「語りかけられるもの」とは「呼びかけられるもの」*das Angerufene* に他ならず、しかも「何を呼びかけるか」というと、厳密には無である。呼びは何事も語らず、世界の出来事について何の情報も與えず、何も物語るものを持たない。呼びはただ人に對して自分との對話をするように最少限の努力をし、人を最も自己的な存在可能へと呼びさます」ものであるという。(p.273.)「良心はいつでも沈黙の様相で語っている」(p.273.)であり、「呼びは沈黙という不氣味な様相の中で語る」(p.277.)のであるという。このような「沈黙」*Schweigen* についてマックス・ピカートは『沈黙の世界』の中で獨得の論旨を展開して見せているが、恐らくそれはハイデッガーのこの考え方を繼承したものである。

二

佛教では沈黙はどのようにとりあげられていたであろうか。インド佛教において沈黙が重視されていたことは周知の事實であるが、その沈黙はただ黙っているというだけのものであったか、それともっと深い意味を荷ったものであったか、それを明らかにしてみたい。

釋尊は弟子たちや信者たちが何かをお願いしたときに、沈黙によってその請いを受入れられたという。そのことは原始佛教の經典にしばしば說かれるところである。たとえばヤサが出家した日にヤサの父は釋尊に向かって、「世尊、願わくはわが請いを受け入れて、今日、ヤサを伴の沙門として食事を取り給わんことを」と願い出るが、釋尊は沈黙によってその願いを受け入れられている。ここでは、沈黙の中に肯定應諾の意味がかくれていることを知るのである。

沈黙にはさらに深い意味が藏されていることもある。たとえば『ウダーナ』の一節によれば、釋尊がサーヴァツティのジュエータ林園に住していられたとき、托鉢から歸り食事を終えた比丘らが集會堂に集まって次のような噂話をしていたという。「マガダのセーニヤ・ピンピサラ王と、コーサラのバセーナディ王とのどちらの財産が多いか、用材が多いか、藏が多いか、國土が大きいか、乗物が多いか、兵力が大きい

か、神通力が大きいか、威力が大きいか」こうして夕刻に及んだ。夕刻に釋尊は獨坐より立つて集會堂に赴き、何を話しているかと問われる。事情が判明すると釋尊は、

『このような談話をなすのは、信仰心から家を出て、家なき出家の身となつた者にはふさわしくない。おまえたち集える者にとつて、なすべきことは二つのみ。それは法の談話と聖なる沈黙 *yo tussī bhāvo* とびあひ。』

と誡められている。

「聖なる沈黙」が、比丘のなすべきことの一つであることを示された例は他にもしばしばあらわれている。たとえば中部經典の聖求經の冒頭部分には、婆羅門ランマカの庵に集まつて法の談話をしていた比丘たちに與えられた稱讚の言葉の中にもそのことが說かれている。

ところで、この「聖なる沈黙」がいったいどのようなものであったかについては、相應部經典の『比丘相應』の冒頭にそれが明されている。

そこでは、マハー・モツガラナが諸比丘に向かつて自ら問い、自ら答える形式でこう言っている――

『友よ、ここにわたしはこう思つた。聖なる沈黙聖なる沈黙というが、聖なる沈黙とはいつたい何であるか。友よ、そのわたしにこの思いが起こつた。ここに比丘が、對象を大まかに觀察すること (*vitakka*) や精密に觀察すること (*vicāra*) を停止して、内心が

寂靜となり、心が一點に集中し、対象を大まかに觀察すること、精密に觀察することもない精神の安定から生ずる喜びと安樂とのある第二禪に入つて住すること、これを聖なる沈黙というのである。

友よ、わたしは対象を大まかに觀察することと精密に觀察することを停止し、心を一點に集中し、心は寂靜となり、対象を大まかに觀察することも、精密に觀察することもない精神の安定から生ずる喜びと安樂とのある第二禪に入つて住した。友よ、そのわたしに、これらの住に住しつつ、大まかな対象の觀察に伴つて起る想念 *sañhā* と思念 *manasikāra* とが浮かび上つて来る *sam-ud-ācarati* のである。

友よ、そのとき、世尊は神通力を以てわたしに近づきこう言われた——「モツガラーナよ、モツガラーナよ、婆羅門よ、聖なる沈黙に放逸であつてはならない。聖なる沈黙において心を一にせよ。聖なる沈黙において心を集中せよ」と。

友よ、わたしはそののち、対象を大まかに觀察することと精密に觀察することとを停止し、内心は寂靜となり、心を一點に集中し、対象を大まかに觀察することも、精密に觀察することもない精神の安定から生ずる喜びと安樂とのある第二禪に入つて住した。友よ正しく言えば、弟子は師によつて助けられて大神通を得るのである。このわたしに關しても、正しく言えば、弟子は師によつて助けられて大神通を得たのである」と。

この短い記述は、短いながら重要な問題を多く含んでいる。まず、モツガラーナは、このことについて語るとき、誰

からも求められていないのに、「聖なる沈黙、聖なる沈黙」というが、聖なる沈黙とはいったい何であるか」と問いかける。それは他に問うのでなく、自分に問い、自分に呼びかけることである。それは、ハイデッガーが、「呼びは語りの一様相であり」、(p. 269)「呼びは、自己への、その自己存在可能に向かつての呼びさましである」(p. 274)と言つた言葉を思い出させるのである。

またモツガラーナは、自分の問いかけた問題に對して自ら答える。これは「自分との對話」(p. 273)を呼びさますことであり、これには、呼びと語りとの典型が見られると言つていい。さらにモツガラーナは言う。対象に對して大まかに、あるいは精密に觀察することを全く止めてしまふ。そして精神の安定に入る。そうすると必然的に、対象を觀察したときに伴つて起る想念と思念とが自然に浮かび上つて来ると言う。ハイデッガーは、單獨な現存在の只中で「何者かがわたしを呼ぶ」という形で、どこからともなく沈黙の中で語りかけて来るのだと言っている。(p. 277)モツガラーナの言うこともまた實にその通りなのである。「想念や思念が浮かび上つて来る」*sam-ud-ācarati* と言うが、*sam-ud-ācarati* とは、「何者かが話しかけて来る」「何者かが襲いかかつて来る」という言葉でもある。こちらは対象に心を向けていないのに、想念や思念の方からどんどん語りかけて来るのである。

沈黙とはそういうことなのだともツガラナは言うのである。

さらにもう一つ問題がある。それは、そういう状態をモツガラナは「大神通」*mahabhūta*であると言い、それは、「師によって助けられて得る」というのが正しい言い方なのだと言っていることである。しかし、これについては今は一應とり上げぬこととしよう。

三

さて、沈黙における語りについては、『ブラフマ・スートラ』三・一・一七に關するシャンカラの註の中に注目すべきことが言われている。シャンカラはその中にバーフヴァ *Bhava* という仙人の次のような言動を引用している。

ある人がバーフヴァ仙に訊ねた——「幸ある君よ、願わくはわたしに梵について教えられんことを」ところが仙人は沈黙していた。そこでかれは二度、三度とくり返して願った。そのとき仙人が言うのに——「わたしは實に汝に教えた。しかるにおまえはそれを知らない。この自我は寂靜である」と。

このバーフヴァ仙の沈黙は、無知の沈黙ではなくて、知を超起した知の沈黙、静かな觀察と内面的な體驗とが充滿した沈黙であつたことが知られるのである。

大乘經典の中で、沈黙について興味深く語っているのは、

インド佛教における沈黙の意味（紀野）

法華經の「見寶塔品」「從地踊出品」である。見寶塔品の末尾で、「誰がこの法華經を娑婆世界に傳道するか」と世尊が呼びかける。他の世界から來た菩薩たちが應ずると、「止めよ」といつて拒否する。そして「この娑婆世界に六萬恒河沙の菩薩があつて、かれらがわたしの滅後にこの法門を受持し、宣べ説き、開顯する」と言う。

この世尊の問いと答えは、自ら問い、自ら答えるという、呼びと語りの基本的な形をそのまま繼承しているのである。しかも、この言葉に應じて、大地の下の虚空界に住していた菩薩たちが、大地の裂け目から涌出して、大地の上の虚空に立つ。この地涌の菩薩たちが釋迦如來を禮拜し、菩薩の讚頌によつて讚嘆しているあいだに滿五十中劫が經過し、釋迦如來はその滿五十中劫のあいだに沈黙していられた *tuṣṭim abhūta* という。四種の會衆もその滿五十中劫のあいだ沈黙して立っていた。しかも、かれら四種の會衆はそれを午後の半日であると感じていたという。「それは世尊の神通によるものであつた」と經典は明記している。

從來の解釋では、世尊の神通力によつて、滿五十中劫の長さを午後の半日としか感じなかつたとするのであるが、これは、モツガラナが、聖なる沈黙そのものを大神通と呼んでいたように、その沈黙そのものが世尊の示された大神通であると考えらるべきであらう。